

当報告の内容は、報告者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「参照文法書研究」（2016 年度第 2 回 [通算第 2 回] 研究会）

Title: Studies on Reference Grammars (2nd meeting)

日時：2016 年 11 月 26 日（土）13:00–18:00, 2016 年 11 月 27 日（日）10:30–15:00

Date: Nov. 26–27, 2016 (Sat. & Sun.)

場所：AA 研マルチメディアセミナー室（304）

Venue: Room 304, ILCAA

主催：基幹研究「多言語多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」（LingDy3）

Organized by Linguistic Dynamics Science (LingDy3)

1. 加藤重広（北海道大学，AA 研共同研究員）

「日本語の文法書について」

日本語を対象とする利用頻度の高い参照文法書が存在しない理由について、日本語の主な文法書を概観しつつ考察を行った。そもそも、日本語は漢字を借用し、孤立語たる古代中国語と接触する中でみずからの膠着語的特徴を認識するに至ったが、規範としての規則という点では歌学書の影響が大きいと考えられる。近世後期の国学においては、品詞分類や活用表の作成のほか、係り結びの記述がなされたが、これも歌学書の伝統を潜在的に反映している。八衢派を中心とする国学の成果は整理されて、近代以降の文法にも取り込まれている。近代以降の文法では、辞書の記述の基準を定めるというための大槻文法は比較的中立的で思想性も強くない。文が統覚作用によって完結させられ、まとまった命題内容を伝えるとする山田文法は、日本語には日本語の論理と規則性があった点、後続の文法にさまざまな形で取り込まれていった点を見ると、かなり大きな影響力を有していると言えるが、思想性も強い。学校文法の基盤となった橋本文法は、形式性に基準を置き、教育現場で用いられる解釈文法として一定の要件を満たしており、思想性は強くない。時枝文法は、言語過程説を基盤とし、反言語学的な色彩が色濃いなど思想性は強いが、技術論的には橋本文法との差異は想定より大きくない。その他、佐久間文法、三上文法、南文法、寺村文法、渡辺文法、教科研文法、日本語記述文法、Martin の参照文法などを瞥見し、母語話者にとっての文法は、教育上の規範となり、解釈文法としての必要性が高いこと、文法研究者が音声や語彙などを専門外として敬遠する傾向があること、先行する規範的文法理論を批判することにより思想性がつよくにじみでること、などの事情から、日本語に関する有用性の高い参照文法がつくられにくい状況があることを指摘した。

3. 吉岡乾（国立民族学博物館，AA 研共同研究員）

「ブルシャスキー語の文法書について」

パキスタン北部やインド北西部を中心に話されている，系統的孤立語であるブルシャスキー語に関して，言語の概要を解説しつつ，20 世紀前半から始まったこれまでの文法記述を総覧した。参照文法と呼べそうな研究は全部で 10 あり，その中でも Lorimer (1935–38), Berger (1974, 1998) 辺りが，現時点で参照するのに良い研究であることを示した。

更に，各参照文法書を俯瞰しながら，次のような，ブルシャスキー語の文法に関する記述上の問題点を 7 つ示した：正体不明の音素，表記法，（例えば）活用形に関する名称の不一致，機能が不明瞭な動詞派生接頭辞 d-，分裂能格性，受動表現と受動構文，語彙集の項目の並べ方。これらの中には，各研究を読む上で留意したほうが良い，というものもあれば，未解決の問題もある。

4. 新永悠人（成城大学，AA 研共同研究員）

「日琉諸方言の文法書：研究史の整理」

記述文法を「当該言語で発話された全ての表現について，一貫した形態素分析とグロスを振ることを可能にするもの」と定義した場合，日琉諸方言の記述文法に分類されるものは下記のものである。本土諸方言では 3 つ，琉球諸方言では 6 つ挙げられる。後者は全て博士論文である。

1. 本土諸方言の記述文法

- 山浦玄嗣（2000）『ケセン語大辞典』（無明舎出版）総頁数は 1445 頁（記述文法は 191 頁分）
- 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦（編）（2015）『甕島里方言記述文法書』（国立国語研究所）総頁数は 194 頁（記述文法は 174 頁分）
- 小西いずみ（2016）『富山県方言の文法』（ひつじ書房）総頁数は 363 頁（記述文法は 165 頁分）

2. 琉球諸方言の記述文法（全て博士論文）

- Shimoji, Michinori. 2008. A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language. ANU. 602 pages（記述文法は 566 頁分）
- Pellard, Thomas. 2009. Ōgami. EHESS. 431 pages（記述文法は 211 頁分）
- 林由華（2013）「南琉球宮古語池間方言の文法」（京都大学）総頁数は 231 頁（記述文法は 186 頁分）
- Niinaga, Yuto. 2014. A grammar of Yuwan, a northern Ryukyuan language.（東京大学）総頁数は 550 頁（記述文法は 526 頁分）
- 原田走一郎（2015）「南琉球八重山黒島方言の文法」（大阪大学）総頁数は 282 頁

(記述文法は 199 頁分)

- 白田理人 (2016) 「琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の文法」(京都大学) 総頁数は未詳。

記述に使用される概念(用語)に注目した場合、山浦(2000)以外はすべて、他言語との類型論的比較が相対的に簡便な概念(音素、接辞、句、節など)を使用している。

本発表では、上記以外にも、日琉諸方言を体系的に捉えようとしている文献を示し、それぞれに用いられる概念(用語)とそれらを使用する研究者集団について簡潔に特徴を述べた。最後に、特に北琉球の研究で使用される「基本語基」、「連用語基」、「音便語基」の概念を用いた動詞の記述の問題点を示した。

5. 下地理則(九州大学, AA 研共同研究員)

「日琉諸方言の文法書: 理論的・方法論的な問題点と今後の動向について」

本発表では、日琉諸方言の参照文法に関する研究史を概観し、その問題点を指摘した。

研究史の観点からは、特に本土方言の研究者たちが参照文法に対して積極的ではなかった点を指摘し、それと対照的に、琉球諸語の若い研究者たちが博士論文として参照文法を次々に完成させていることを指摘した。そのうえで、なぜ参照文法研究が重要なのか、参照文法を書くうえで必要な条件や重要な観点は何か、という方法論的な問題を議論した。上記に関して、例えば単位の認定(品詞分類、語の認定、etc.)など、理論的な問題にも触れつつ、グロスの整備など、方法論的な問題を列挙し、参加者からのフィードバックをおおいだ。

最後に、若手研究者育成を中心に、今後の展望の具体策を論じた。